嗚呼、インドネシア　　Ah, INDONESIA

第 16 話　インドネシアのジョーク集

お気づきのように、インドネシア人たちはよく笑います。これはストレス解消のためだと言いわけしていますが、これは「ウソ」です。というのは、ストレスがたまりそうな仕事をしている人にはこういうジョークを多発しゲラゲラ笑いころげるタイプは少なく、どう見てもストレスの少ない仕事をしている人や、ストレスが近寄りたくなくなるタイプの人によく笑う人が多いからです。

足掛け 20 年間のインドネシアでの仕事・生活の中で拾ったり作ったりした小噺の内、いくつか選んでお届けしようと思います。この中のいくつかを会社で披露されれば、あなたも、もう立派な国際人でユーモアがあるとみんなから尊敬されることは確実です。

ジャンボジェットのインドネシア人

太平洋上を飛んでいたジャンボジェットが火災を起こしました。この飛行機には日本人と、アメリカ人、そしてインドネシア人がほぼ三分の１づつ、満席で詰め込まれ、東京からロサンゼルスに向かう途中だったのです。４台のエンジンのうち三台まで火災が広がり、残りの一台のエンジンでかろうじて飛んでいたのです。この飛行機は計器の故障から通常の航行コースを外れており、近くには一隻の船も見あたらなかっただけではなく、下界の太平洋は強力な低気圧で数メートルの高い波が立っていました。

窓の外を見ていた日本人がこの火災に気付き、回りの日本人乗客も騒ぎ始めました。このままでは全員墜落死だと「パラシュートを出せ。われわれは飛び降りる」と口々にスチュワーデスに要求したのです。もちろん、ジェット旅客機にはパラシュートなど積んでいるはずがありません。第一、パラシュートがあったとしても高速で飛んでいるジェット機から飛び降りるなんてとうてい不可能です。日本人乗客の声はだんだん怒号に近くなってきましたが、積んでいないパラシュートを乗客に渡せるはずはありません。どうしてくれるんだと乗客達はパーサーに詰め寄っていました。

日本人たちの声がだんだん大きくなっていく中で、アメリカ人乗客も騒ぎだし、事情説明のため客室にきていた機長に「非常着水せよ」と要求しましたが、「おりからの低気圧で下界は嵐の中。着水すれば機体はバラバラになってしまうし、計器の故障で船舶の大圏コースから外れているので救助の見込みがまったくない」との説明がありました。でも、諦めきれないアメリカ人の一部はまだ非常着水にこだわっています。さきほどの日本人がこれに加わり、機内は騒然としてきましたが、火災を起こしたまま飛行機は飛び続けています。日本人もアメリカ人も怒号の応酬をしている丁度さなか、やおらインドネシア人の偉そうな人が立ち上がって、乗客みんなに向かって大声で叫びました。

「ムシャワラで決めよう」と。

脳味噌の値段

外人がインドネシア人の友人をつかまえて尋ねました。「どこの国民の脳味噌が世界中で値段が一番高いか知っている？」

余りに突拍子もない質問にインドネシア人はしばらく考えた末、にこにこしながら「ウーム、降参。分からない。それはいったいどこの国民だい？」と尋ね返しました。その外人は「明日まで考えておいで」と真顔で言って、二人は分かれたのです。

さて、翌日、くだんのインドネシア人は外人に「一晩寝ずに考えたけど、分からなかった。脳味噌の値段の一番高い国民はどこの人達だい？」と尋ねました。この外人は悲しそうな顔をして「それはインドネシア人だよ」と答えたのです。怠け者だとか気が利かないとか外人がいつも馬鹿にしているインドネシア人の脳味噌の値段が世界中で一番高いのかと不思議に思ったインドネシア人は外人にその理由を聞きました。外人は「明日まで考えておいで」と今度はニヤニヤしながら言ったのです。

その翌日、「なぜインドネシア人の脳味噌の値段が世界中で一番高いの？」と外人に尋ねたインドネシア人はその答を聞いて唖然としました。

それは、「まだ使ったことがないから」というものだったからです。

怒ったら、負けよ

ベルギー人が自分の会社のインドネシアの工場に新しく導入した紡織機の据え付け調整と技術指導に来ていました。新しい機械は最新鋭で、今までのものに比べると格段に速く、さらに材料の糸が切れたりもつれたりした場合には自動的に停止する安全装置がついていました。

インドネシア人の操作員に彼は一通りの説明を行いました。「僕の説明が分かりましたか？」と尋ねられた操作員は大きく首を縦に振り、十分理解したと身ぶりで答えました。

「じゃあ、僕の前でやってごらん」といわれた操作員は機械を始動しました。その新鋭機は最初は順調に動いていたのですが、ボビンの中の材料の糸が切れているところで自動的に停止しました。「ほら、止まった。こうして機械が止まったら、続きの糸をここととここに掛けてスタートボタンを押せば、すぐ動くでしょ」と言いつつ自分で糸を掛けて機械を動かしました。「分かった？」と言われた操作員は同じように大きく首を縦に振りました。この指導員はほかにも仕事がたくさんあったので、これだけでその場を離れていきました。

翌日、工場に出向いたこの指導員は、新鋭機がまた止まっているのを見て、同じように糸を機械に掛けてスイッチを押し、「分かった」と尋ねました。操作員は同じように首をコクンと振りました。その翌日もまた、この機械が止まっていて、「分かった」、コクンの繰り返しでした。

これが一週間も続くと、さすがに気が長くて親切なベルギー人も頭にきて、ホテルでの夕食中に仲間に当たり散らしました。「インドネシア人は猿と同じだ。考える頭が全然ない馬鹿ばかりだ」と。 すかさず、仲間の一人が「インドネシア人の面前で、馬鹿だとかなんだとか絶対にののしってはいけないよ」と忠告しました。これを聞いたこの指導員は頭からポッポと湯気を出して「なんだお前、長いことインドネシアにいるくせに、この俺の怒りが分からないのか。それともお前もインドネシア化しちゃったのか」とかみつきました。これを無視して、忠告は次のように続きました。

「もしわれわれがののしったりして、インドネシア人が本当に何でもわれわれみたいにできるようになったら困るのは君自身なんだ。君と僕らの子供達が将来もインドネシアで稼げるためにも、われわれはインドネシア人達をののしらないように十分注意しなくちゃいけないんだ」と。

中国、日本、インドネシアの居合い抜き

その昔、中国人と日本人とインドネシア人の侍がテーブルを囲んで食事をしていました。うるさくまとわりつく蝿が8匹、ぶんぶんと飛び回り落ちついて食事もできません。

そこで、「飛んでいる蝿を落とすことのできる剣の達人はこの三人のうち誰だろう」との話が持ち上がりました。三人とも母国では武術の道で音に聞こえた達人です。

まず、中国人が立ち上がり、やおら「ハッチョー」というかけ声とともに青龍刀を振り回し、四匹を切り捨てました。「どうだ、わしの技量が分かったか」と髭面の武士は二人を睨みつけながらドンと椅子に腰掛けたのです。「なにをこしゃくな」とばかり、負けず嫌いの日本の侍は椅子から立ち上がりもせず、居合い抜きを披露して、目にも止まらぬ速さで三匹を落としたのです。中国と日本の侍は「フン、どうだ」とばかりインドネシアの侍を見下しました。

この冷笑に微笑みを返したインドネシアの侍は、クリスを抜き出すと空中で一振りし、そのまま椅子に腰掛けたのです。

蝿は前にも増してぶんぶんとうるさく飛び回っています。中国と日本の侍は顔を合わせて、インドネシアの侍に「だめだなぁ。インドネシア人は。蝿一匹落とせないんだから」と声をそろえて言ったのです。すると、インドネシアの侍は飛んでいる蝿を指さしてにこにこしながら「あいつにちょっと割礼をしてやっただけなんだよ」と答えたのでした。

世界最高級なインドネシア産品

日曜日に買い物に日本人が出たときに、同行したインドネシア人の友人がショーウィンドウの中をのぞき込んで、ため息混じりに「日本製は何でも良いものばかりだけど、インドネシア製は何でも品質が良くない。わが国の製品はどうしてこんなに質が悪いのだろう」とつぶやきました。

この日本人は心優しい人だったので親友のこのインドネシア人を慰めました。「インドネシアの純国産品で世界一流の質の良いものがあるんだ。元気を出せよ」と。

えっ、と驚き「それは一体なんだい？」と尋ねた、その答は「インドネシア人」だったのです。

インドネシア人同士のあつれき

バタック人とジャワ人が、お互いの部族の悪口をたたき始めました。まず、ジャワ人が口火を切り、「バタック人は怠け者ばかりで国家の建設には全く役に立たない。バタック人が一人でいる時はギターを抱えて歌ってばかり、二人いればすぐにチェスだ。沢山いたら仲間うちで喧嘩ばかりしている。どうしようもない部族だ、バタック人は」と言ったのです。

これを受けたバタック人が切り返しました。「ジャワ人が一人だと、ミンタ・ミンタばかりだ。二人いたらおしゃべりばかりで手が進まない。そっちこそ国家の建設に役に立っていないじゃないか」と、ここでバタック人は話を止めました。

先を聞きたいジャワ人は「じゃあ、ジャワ人が沢山いたらどうなるんだい」と聞きました。

その答は一言「トランス・イミグラシ」。

日本人の宗教は仕事だ

とあるインドネシア人が日本人の友人に言いました。「インドネシア人は人生のほとんどを仕事ではなく宗教に捧げて、われわれの行動は宗教にきつく縛られている。われわれを回教徒と呼ぶのなら、日本人は『仕事教徒』だね。会社の仕事に縛られどおしで、自分の生活がないじゃないか。(Orang Japang Agamanya Kerja)」と。

いつもからかっているインドネシア人からこう言われて、二の句がつげなくなりました。そういえば、ロッキード事件の時に「会社は永遠です」と言って自殺した商社員もいましたよね。

マンゴーのお礼

ひと昔前の話。

カンポンを通りがかった町の人が、マンゴーが枝もたわわにおいしそうに熟しているのを見つけました。マンゴーの木の下でちょうど遊んでいた男の子に頼んで実を取ってもらいました。この男の子はパンツをはいていなかったので、枝から枝へわたる時に、下から丸見えでした。ふびんに思った町の人は「これでパンツを買ってもらいなさい」と Rp50 を男の子に渡しました。

この子はとても良い子だったので、お金をもらった一部始終をその晩に母親に話したのです。

そこで一計を案じたこの母親は、翌日の朝からマンゴーの木の下で町の人が通りかかるのを待っていました。すると思い通りに町の人が通りかかって、マンゴーを取ってくれないかと頼むではありませんか。待ってましたとばかり、母親は木に登りいくつかの実をその人に渡しました。またしても、昨日と同じように「おかみさん。下から見えちゃいますから、ちゃんとしておかなくちゃだめですよ」と今度は Rp100 をその母親に渡しました。

母親はこの Rp100 を持って村の雑貨屋に行き、町の人に言われたように「ちゃんとする」ために買ったものは、「カミソリ」だったのでした。

霊界電話

アメリカはエレクトロニクスでは世界一進んでいる国なのはご承知のことと思います。

スハルト大統領が在任中にアメリカに行ってクリントン大統領と話していた時に、クリントンが

「奥様が亡くなられてさぞかし寂しいことでしょうね。たまには亡くなられた奥様とお話が出来たら良いんではないかと思って、ここに我が国の最新技術を結集した電話を用意しました。この電話はこの世界だけではなくあの世とも通信できるんです」と、

電話機を手渡したのです。

スハルト大統領が見ると、「天国」と「地獄」というボタンが付いていましたので、「天国」の方のボタンを押しました。つー、つーという呼び出し音がした後、電話担当の天使が出てきました。この天使に「ワシはインドネシアのスハルト大統領だが、つい最近亡くなった妻を呼び出してくれないか」と頼んだのです。「少々お待ちください、今コンピューターで奥様の内線番号を調べますから」と数秒待たされた後「申し訳ございません。奥様はこちらには登録されていらっしゃらないようです」との答えがありました。

「ううっ、ティンは地獄なのか」とスハルト大統領が「地獄」の方のボタンを押すと、電話担当の悪魔が出てきました。そして、すぐにティン夫人に繋いでくれたのです。久しぶりのティン夫人との会話で話が弾み、制限時間の10分はすぐに終わってしまいました。

名残惜しそうにしていると、クリントン大統領が「よろしかったらお持ち帰りになれば？」と勧めてくれたので、その電話機を貰って帰国しました。

さすがアメリカ、電話の直後に電話代の請求がありました。代金は$5,000 だったのです。スハルト大統領はお金持ちなので、その場で秘書が現金で払ってしまいました。

インドネシアに戻った大統領は早速子供たちを大統領官邸に集めて、この電話を使ってティン夫人と子供たちに制限時間の10分ぎりぎりまで話をさせたのです。子供たちはアメリカのこの技術力にびっくりしながらも亡き母との会話を楽しんだのです。この日は夜遅かったので、翌朝さっそく電話代の請求書が届きました。その請求はルピアでしたが、換算してみるとたったの$1,000 だったんです。

びっくりしたスハルト大統領は、ホットラインでクリントン大統領に尋ねました。「アメリカで霊界電話をかけた時は$5,000 だったけど、インドネシアで同じ時間かけてもたったの$1,000 でしたよ。我が国の公共料金は安く押さえているのだけど、一体どうしてこんなに差が出たのでしょうねぇ」

クリントン大統領は悲しそうに答えました。「アメリカはおかけになったところから遠いから電話代もかさむのですよ。でもインドネシアは.....」とホットラインが切れてしまいました。

神様だって泣いてしまう

フィリピンの大統領、フィデルラモスが神様に面会してこう尋ねた。「神様、わたしはもう五年間フィリピンを統治してきたのですが、今後どのくらいたったら国民たちは幸せになれるのでしょうか？」

「三十年後だね」と神様はおっしゃった。

ラモスはそれを聞いて号泣した。

次に、ラナリットをクーデターでひっくり返したカンボジアのフンセン首相が神様に面会して、お願いした。

「神様、わたしはまだ一年しかカンボジアを統治していませんが、今後どのくらいたったら国民たちは幸せになれるのでしょうか？」

「五十年後だね」と神様はおっしゃった。
フンセンはそれを聞いて号泣した。

そのあと、スハルトが神様に面会してこう尋ねた。「神様、わたしはもう三十年間インドネシアを統治してきました。今後どのくらいたったら我が国民たち一人一人が本当に幸せになることができ、パンチャシラに基づいて公平で繁栄した国民生活を送れるようになれるのでしょうか？」

神様は何もおっしゃることができず、ただ泣き崩れただけであった。

スハルトだって死ぬんだ

スハルトだって生身の人間だからいずれ死ぬことになる。

彼の霊は煉獄にとんでいくことになる。煉獄では、スハルトの霊が飛んできたのを見た大天使ガブリエルはその霊を迎えいれ、スハルトと腕を組んでそのまま地獄へ連れて行った。

これに気づいたスハルトは激しく抗議した。なんで、大天使がワシの霊を直ちに地獄に連れて行くことができるのか。生前は善行を沢山したではないか。特筆すべきはインドネシア国家と民族に対してだ、と。

「大天使、あなたは間違えている。天国に連れて行くのが本当だ」とスハルト。

大天使はこう答えた。「それはできません。あなたが生きていた間、私があなたを見守ってきたのです。また、あなたご自身が国民にたいそう悪口を叩かれていたような悪業を私はすべて見ていたのです。あなたが善行と呼んでいるものはただのカムフラージュだけでした。モスク建設のための寄付などは、汚職で得た

汚れたお金から出されたものでした。ハッジに行った資金でさえ、あなたが操作して儲けたたものだったのですから」

スハルトの霊と大天使は自分の意見を曲げず、口角泡を飛ばして口論をしているうちに、彼らは地獄の扉の前まで来てしまった。地獄の門番のイブリース(悪魔)が彼らを止めて、「こいつは誰だ」と大天使に尋ねた。

「ハッジ・モハマッド・スハルトだ」と大天使は答えた。

「ちょっと待て！」と、イブリースは大きな分厚い一冊の地獄の住民台帳をチェックしながら言った。 悪魔が顔を上げるまではそれほど長いことはなかった。そして「ハッジ・モハマッド・スハルトという名前は地獄の住民台帳には見当たらない」と言ったのだった。

「イェーイ」

スハルトは喜んで大天使をからかうように舌を出したあと、こう叫んだ。「これを聞いたか。すぐに天国にワシを連れて行け」

「ちょっと待て！」

と、イブリースは手を上げて、「あなたの名前がこの記録にないのは、これは大衆用の地獄の住民台帳だったからだ。う―――ん、あったぞ、あったぞ。あんたの名前がここに」と、イブリースはとても豪華にみえる台帳の一ページをスハルトと大天使に指し示しながら言った。

スハルトが覗いてみると、その本にはハッジ・モハマッド・スハルトという名前があり、それには「第一番」という印がついていた。

その台帳の上の方には大きな文字で「地獄住民の王者の名前一覧表」と書いてあった。

スリとはいえども他人をがっかりさせることは悪いことなのだ

これは 1990 年代の実話です。

地方に出張するたびに一緒に働いていた友人が久しぶりにジャカルタに出てきました。この人はいつもお金がなくてピーピーしていたのです。

たまにジャカルタに来たのだからたまにはグロドックに行ってみようと案内しました。

ジャカルタのグロドックといえば電化製品や小型機械の店がひしめき合っている場所です。もちろんこの場所はスリや置き引きで全国的に有名な場所でした。

グロドックに着いたのはお昼前で、小腹がすいたので近くの屋台街へとしけこんで、地方の友人はサテ、僕はソトアヤムを注文しました。僕が先に食べ終えたので、友人の分まで一緒に払って外でタバコをすっているとその友人が口をもぐもぐさせながら出てきました。

「おい、オレの分はいくらだった。払うよ」と。

「ちょっと待てよ。こんなところで財布を開けるんじゃないよ。……。スリががっかりするじゃないか」

一瞬考えた友人は烈火のごとく怒りました。

2006-04-01 作成
2014-09-29 PDF 化